

なぜ子どもは自分のいじめ被害を隠すのか

－規範意識および友人認識との関連－

*久保 順也

Why do children conceal the fact that they were bullied?
- Relation with normative consciousness and recognition of friendship-

KUBO Junya

Abstract

Sometimes children conceal the fact that they were bullied. The purpose of this study is to examine relation between children's concealing their damages by bullying and normative consciousness. It was hypothesized that normative consciousness, recognition of friendship, and hesitation to consult with someone on bullying would promote concealing. By means of the questionnaire survey, elementary school students' answers were collected and analyzed. As a result, it became clear that the more normative children are, the less they bully and the less they conceal the fact that they were bullied. It was discussed the relation between fostering children's norm consciousness and preventing bullying.

Key words : Ijime (bullying) (いじめ)
concealing damages by bullying (いじめ被害の隠蔽)
normative consciousness (規範意識)
recognition of friendship (友人認識)

1. 問題と目的

児童生徒間のいじめ問題は現代の学校現場における最重要課題である。2015年度間に全国の学校(小学校・中学校・高等学校・特別支援学校)にて認知されたいじめは224,540件であり過去最高となっている(文部科学省初等中等教育局児童生徒課,2016)。この認知件数増加の背景には、2013年に制定された、いじめ防止対策推進法において、いじめが幅広く定義されたことや、文部科学省の捉え方として「いじめの認知件数が多い学校について、『いじめを初期段階のものも含めて積極的に認知し、その解消に向けた取組のスタートラインに立っている』と極めて肯定的に評価する」(文部科学省初等中等教育局児童生徒課,2015)とする

姿勢が大きく影響していると考えられる。つまり、軽微ないじめ事案も計上された結果としていじめ認知件数が増大していると思われるが、一方でいじめ被害を苦しめた児童生徒の自死案件が全国で相次いで発生していることから、事態が改善しているとは言いがたい。

いじめ問題の困難さの一つに「発見の難しさ」を挙げることができる。そもそも、いじめを発見できないと対応を開始することができないため「取組のスタートライン」で躓いてしまうことになる。いじめの発見が困難なのは、第一に、当然のことながらいじめは大人の目の前で行われず、隠れて行われるためである。時に加害者は、自らの行為をいじめと認識しておらず、当該行為をいじめと指摘されても否定したり「遊んでいるだけ」「ふざけていただけ」と主張したりす

* 学校教育講座

ることがある。実際に、「冷やかしかからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる」といういじめ被害は全体のうち63.5%を占め、最も多く発生しているいじめの態様である(文部科学省初等中等教育局児童生徒課,2016)。これらのいじめは「ふざけ」や「いじり」との区別が難しく、教員による対応も困難であることが推測される。

いじめの発見が困難な理由の二つ目として、「発見」の段階において、時にいじめ被害者自身がその被害事実を教員等の支援者に訴えなかったり、隠そうとしたりすることを挙げることができる。

いじめ加害者が自らのいじめ行為を隠蔽しようとするのは自然なことと言えよう。しかしいじめ被害者自身もまた、自分が被害に遭っていることを隠蔽しようとすることがある。上地(1999)によれば、中学生は、いじめ対処のための最も有効な方法として「無抵抗・服従」を選択しており、結局はそれがいじめの継続と深刻化、遷延化につながってしまう。いじめられた子どもたちがこうした不合理な解決方法を選択してしまうのはなぜだろうか。自らの被害を教員や保護者等に訴えることで問題解決を図ることが期待できるはずなのになぜ訴えないのかという疑問が生じるが、その理由は複数考えられる。

まず、いじめ被害を訴えて教員が介入することで逆に被害が拡大することへの懸念がある。さらに、自分自身をいじめられっ子と認識することで自尊心が低下するため、被害を自認することへの抵抗感も生じる。また、保護者に心配をかけたくないと考えていたり、保護者が関与することによって問題が複雑化することを避けたいと考えていることがある。あるいは被害者は、自らの被害をいじめと認定することによって、いじめ加害者と自分との関係が「いじめっ子-いじめられっ子関係」へと変化し、従来までの友人関係が変質してしまうことへの恐れもあるものと思われる(久保,2013)。これらの理由から、いじめ被害者もまたその被害事実を隠蔽し、結果としていじめ被害が継続し深刻化していくことがある。

友人関係維持のために、いじめ被害者自身がその被害を隠蔽しようとする反応について、久保・佐藤(2014)は、大学生を対象に調査を実施し、友人からいじめを受けた被害者が、いじめ行為自体を認識しながらも、相手のことを「親しい友人」と捉えている可能性を指

摘した。つまり、いじめ被害者は相手との友人関係が解消されてしまうことを恐れて、いじめ被害を隠そうとする傾向がある。このような、いじめ被害者が相手との友人関係維持の方を自らの被害解消よりも優先してしまう背景には、例えば「友達とは仲良くあらねばならない」「トラブルを起こしてはならない」といった規範意識が働いている可能性があり、結果として一見不合理ないじめ解決方法につながっているのではないかと考えられる。

また一方で、こうした規範意識が強すぎる場合、集団から逸脱しがちな者を排除しようとする行動に走りやすいと考えられる。つまり規範意識が強い者ほど、いじめ加害者にもなりやすいのではないか。例えば、学級の中で落ち着きがなく多動であったり、周囲の児童生徒にちょっかいを出したり衝動性の高い、いわゆる ADHD の特徴のある児童生徒は、周囲の児童生徒から過剰な注意や叱責を受けたり排除されやすいことが指摘されている(宮城教育大学 BP プロジェクト,2017)。こうした状況下では、衝動性が高く多動な児童生徒は、周りからはむしろ加害者と捉えられており、周囲の児童生徒は「その子が他の子に迷惑をかけている」「トラブルを起こしてほしくない」と考えている児童生徒も多いことが明らかとなっている(同)。

そこで本研究では、小学生を対象に質問紙調査を実施し、児童の規範意識といじめ被害隠蔽およびいじめ加害傾向との関連を検討するため、以下の二つの仮説を立てて検証する。

- ①規範意識の強い子どもほど、いじめ被害の事実を隠そうとするだろう
- ②規範意識の強い子どもほど、いじめ加害の傾向が高まるだろう

2. 方法

・調査時期と調査対象

2015年12月、ある公立小学校に在籍する3年生から6年生を対象にアンケートを実施した。各学級担任がアンケート用紙を配布し、その場で記入させた後に回収された。得られた回答数は3年生151名、4年生128名、5年生144名、6年生139名、合計562名分であった。

• 質問紙の構成

質問紙の構成は以下のとおりであった。

- ①フェイスシート：「学校生活についてのアンケート」と題され、記入上の注意点が示された。学年と性別を尋ねる項目が設けられた。
- ②しつもん1：社会的責任目標尺度(18項目)：「あなたの学校生活について聞きます」とし、「がっかりしている人がいたら、なぐさめたり、はげましてあげようと思います」等の8項目からなる「向社会的目標尺度」と、「友だちとしゃべりたくなったり、授業中はがまんするようにします」等の10項目からなる「規範遵守目標尺度」に5件法により回答させた。なお本研究では仮説に関連する「規範遵守目標尺度」10項目のみを分析・考察対象とした。
- ③しつもん2：関係性攻撃傾向尺度(14項目)：「ほかの人とのつきあい方について聞きます」とし、「きれいな人が来たら、他の友だちをさそって別の場所に行くことがある」等の14項目に5件法により回答させた。
- ④しつもん3：いじめ被害の隠蔽に関する自作の尺度(21項目)：「もしあなたが『友だちからイヤなことをされたけれど、このことはほかの人には相談しないで、だまっておこう』と考えるとすれば、それはなぜでしょうか」と問い、「そんなに大変なことではないと思うから」等の項目ごとにあてはまる割合

いを5件法により回答させた。

3. 結果

空欄や不良回答を除いた有効回答数は511名分(3年生132名、4年生116名、5年生135名、6年生128名)であった。

I 学年および性差と規範遵守目標尺度得点との関連について

社会的責任目標尺度のうち、規範遵守目標尺度得点を従属変数とし、学年および性差を独立変数として二元配置分散分析を行ったところ、交互作用は有意ではなく($F(3,503)=1.318, n.s.$)、学年($F(3,503)=14.159, p<.001$)、および性差($F(1,503)=28.865, p<.001$)の主効果がそれぞれ有意であった。Tukey法による多重比較の結果、6年生は3、4、5年生よりも得点が有意に低かった($p<.001$)。このことから、男子よりも女子の方が規範遵守目標尺度得点が高く、また6年生において同得点が最も低くなることが分かる。規範遵守目標尺度得点の高低に学年および性差の要因が関連していることが明らかとなったため、以下の分析にはそれぞれの要因を独立変数に含めて検討する必要がある。各学年および性別の規範遵守目標尺度得点平均値のグラフを Figure 1 に示した。

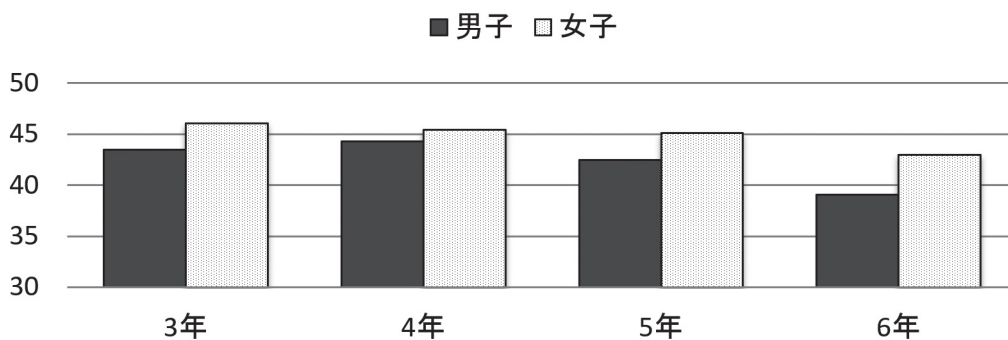


Figure 1 規範遵守目標尺度得点の平均値(学年・性別)

II 学年、性別および規範意識といじめ被害隠蔽との関連について

まず、いじめ被害の隠蔽に関する尺度21項目の得点を用いて因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行ったところ、当てはまりの悪かった「自分にも悪い

ところがあると思うから」を除いた20項目によって、「トラブルをおこしたくないから」等7項目からなる第1因子と、「その友だちとなかよしでいたいから」等4項目からなる第2因子、および「はずかしくて、だれにも言えないから」等5項目からなる第3因子、さ

らに「自分がされていることは遊びだと思っから」等4項目からなる第4因子の四因子構造が得られた。項目内容から、第1因子の項目を「問題悪化を恐れての隠蔽」に関する尺度、第2因子の項目を「友人関係維持のための隠蔽」に関する尺度、第3因子の項目を「相談行為自体のデメリットによる隠蔽」に関する尺度、第4因子の項目を「被害の否認」に関する尺度とそれぞれ解釈した (Table 1)。それぞれの項目により構成

される尺度の信頼性を検討するため Cronbach の α 係数を算出したところ、第1因子「問題悪化を恐れての隠蔽」に関する尺度は $\alpha = .83$ 、第2因子「友人関係維持のための隠蔽」に関する尺度は $\alpha = .82$ 、第3因子「相談行為自体のデメリットによる隠蔽」に関する尺度は $\alpha = .75$ 、第4因子「被害の否認」に関する尺度は $\alpha = .75$ とそれぞれ十分な数値が得られたため、以下はこの四つの尺度ごとに因子得点を算出して分析に用いた。

Table 1 いじめ被害隠蔽に関する項目の因子パターン行列 (主因子法・プロマックス回転)

項 目	因 子 負 荷 量			
	F1	F2	F3	F4
第1因子 (問題悪化を恐れての隠蔽) $\alpha = .83$				
トラブルをおこしたくないから	.86	.10	-.17	-.01
先生や親をしんばいさせるのがいやだから	.69	.20	-.02	-.10
その友だちとめんどうなことになるのがいやだから	.63	-.01	-.04	.17
ほかの人を、まきこみたくないから	.61	.07	.06	.01
自分さえがまんすれば、なんとかこのままやっていけると思うから	.53	-.14	.15	.16
相談してもむだだと思っから	.45	-.33	.32	.13
相手のしかえしが、こわいから	.38	.09	.13	-.19
第2因子 (友人関係維持のための隠蔽) $\alpha = .82$				
その友だちとはなかよしでいたいから	-.04	.81	.01	.10
その友だちとの関係をこわしたくないから	.12	.69	.04	.02
だれとでもなかよくするというきまりを守りたいから	.02	.65	-.05	.06
ほかの人に知られたら、これまでどおりのつきあいができなくなると思っから	.26	.39	.16	-.01
第3因子 (相談行為自体のデメリットによる隠蔽) $\alpha = .75$				
はずかしくて、だれにも言えないから	-.07	.03	.74	-.05
だれに相談したらいいのか、わからないから	.07	-.00	.57	-.01
相談するのは、かっこわるいと思っから	-.03	.03	.56	.11
相談したらいやな気持ちになると思っから	.18	.21	.36	-.03
そのことについて思い出したくないから	.34	.04	.36	-.12
第4因子 (被害の否認) $\alpha = .75$				
自分がされていることは遊びだと思っから	-.12	.10	.11	.62
自分がされていることは友だち同士のふつうのやりとりだと思っから	-.17	.15	.05	.74
自分がされていることが、いじめだとは思わないから	.16	-.09	-.05	.71
そんなに大変なことではないと思っから	.20	.05	-.15	.47
因子間相関	F1	.56	.66	.38
	F2		.49	.34
	F3			.36

仮説①「規範意識の強い子どもほど、いじめ被害の事実を隠そうとするだろう」を検討するため、まずは第1因子「問題悪化を恐れての隠蔽」尺度得点を従属変数とし、学年、性差および規範遵守目標尺度得点の高低の別（平均値を基準に高群・低群に群分けした。以下同様）を独立変数として三元配置分散分析を行ったところ、二次の交互作用は有意ではなく（ $F(3,495)=.912$, n.s.）、一次の交互作用もいずれも有意ではなかった（学年×性別： $F(3,495)=.193$, n.s.；学年×規範： $F(3,495)=.273$, n.s.；性別×規範： $F(1,495)=.071$, n.s.）。一方で、学年（ $F(3,495)=5.167$, $p<.01$ ）、性別（ $F(1,495)=8.676$, $p<.01$ ）および規範遵守目標尺度得点高低（ $F(1,495)=16.445$, $p<.001$ ）の主効果がそれぞれ有意であった。Tukey法による多重比較の結果、6年生は3年生（ $p<.05$ ）および4年生（ $p<.001$ ）よりも得点有意に高く、また5年生は4年生よりも得点有意に高かった（ $p<.01$ ）。また、男子よりも女子の方が得点が高く、規範遵守目標低群の方が同高群よりも得点が高かった。各学年、性別および規範遵守目標高低別の「問題悪化を恐れての隠蔽」尺度得点平均値のグラフをFigure 2に、記述統計量をTable 2に示した。

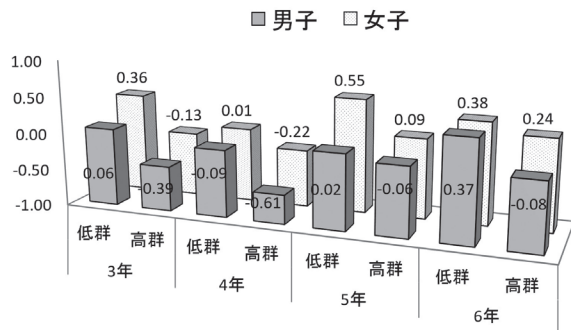


Figure 2 「問題悪化を恐れての隠蔽」尺度得点の平均値（学年・性別・規範遵守目標尺度得点の高低別）

Table 2 「問題悪化を恐れての隠蔽」尺度得点の平均値と標準偏差

	3年		4年		5年		6年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
規範遵守目標高群	-0.39	-0.13	-0.61	-0.22	-0.06	0.09	-0.08	0.24
(標準偏差)	0.96	0.89	0.90	0.96	0.95	1.00	0.79	0.90
規範遵守目標低群	0.06	0.36	-0.09	0.01	0.02	0.55	0.37	0.38
(標準偏差)	0.97	1.06	0.88	0.90	0.92	0.85	0.77	0.69

続いて第2因子「友人関係維持のための隠蔽」尺度得点を従属変数とし、学年、性差および規範遵守目標尺度得点の高低の別を独立変数として三元配置分散分析を行ったところ、二次の交互作用は有意ではなく（ $F(3,495)=.793$, n.s.）、一次の交互作用もいずれも有意ではなかった（学年×性別： $F(3,495)=.134$, n.s.；学年×規範： $F(3,495)=1.593$, n.s.；性別×規範： $F(1,495)=2.427$, n.s.）。また、学年の主効果は有意ではなかったが（ $F(3,495)=1.370$, n.s.）、性別の主効果は有意傾向（ $F(1,495)=2.877$, $p<.10$ ）、規範遵守目標尺度得点高低の主効果は有意であった（ $F(1,495)=12.391$, $P<.001$ ）。Tukey法による多重比較の結果、男子よりも女子の方が得点が高い傾向があり（ $p<.10$ ）、また規範遵守目標低群の方が同高群よりも得点が高かった（ $p<.001$ ）。各学年、性別および規範遵守目標高低別の「友人関係維持のための隠蔽」尺度得点平均値のグラフをFigure 3に、記述統計量をTable 3に示した。

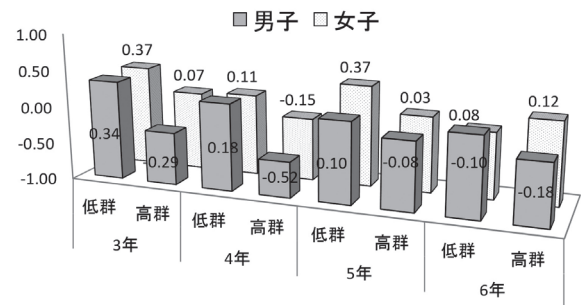


Figure 3 「友人関係維持のための隠蔽」尺度得点の平均値（学年・性別・規範遵守目標尺度得点の高低別）

Table 3 「友人関係維持のための隠蔽」尺度得点の平均値と標準偏差

	3年		4年		5年		6年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
規範遵守目標高群	-0.29	0.07	-0.52	-0.15	-0.08	0.03	-0.18	0.12
(標準偏差)	1.01	0.97	0.92	0.92	0.91	0.98	0.69	0.91
規範遵守目標低群	0.34	0.37	0.18	0.11	0.10	0.37	0.08	-0.10
(標準偏差)	0.85	0.92	0.87	0.85	0.96	0.86	0.77	0.83

さらに第3因子「相談行為自体のデメリットによる隠蔽」尺度得点を従属変数とし、学年、性差および規範遵守目標尺度得点の高低の別を独立変数

として三元配置分散分析を行ったところ、二次の交互作用は有意ではなく ($F(3,495)=1.122, n.s.$)、一次の交互作用もいずれも有意ではなかった (学年×性別 : $F(3,495)=.506, n.s.$; 学年×規範 : $F(3,495)=.152, n.s.$; 性別×規範 : $F(1,495)=.378, n.s.$)。また、学年の主効果 ($F(3,495)=2.708, p<.05$)、性別の主効果 ($F(1,495)=5.276, p<.05$)、規範遵守目標尺度得点高低の主効果 ($F(1,495)=19.192, P<.001$) はそれぞれ有意であった。Tukey 法による多重比較の結果、4年生よりも5年生 ($p<.01$)、6年生 ($p<.05$) の方が得点が高く、男子よりも女子の方が得点が高く ($p<.05$)、また規範遵守目標低群の方が同高群よりも得点が高かった ($p<.001$)。各学年、性別および規範遵守目標高低別の「相談行為自体のデメリットによる隠蔽」尺度得点平均値のグラフを Figure 4 に、記述統計量を Table 4 に示した。

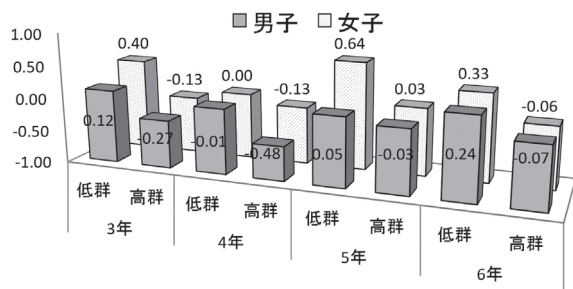


Figure 4 「相談行為自体のデメリットによる隠蔽」尺度得点の平均値 (学年・性別・規範遵守目標尺度得点の高低別)

Table 4 「相談行為自体のデメリットによる隠蔽」尺度得点の平均値と標準偏差

	3年		4年		5年		6年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
規範遵守目標高群	-0.27	-0.13	-0.48	-0.13	-0.03	0.03	-0.07	-0.06
(標準偏差)	0.90	0.79	0.75	0.86	0.85	0.90	0.77	0.88
規範遵守目標低群	0.12	0.40	-0.01	0.00	0.05	0.64	0.24	0.33
(標準偏差)	1.03	0.97	0.90	0.75	0.93	0.96	0.86	0.85

最後に第4因子「被害の否認」尺度得点を従属変数とし、学年、性差および規範遵守目標尺度得点の高低の別を独立変数として三元配置分散分析を行ったところ、二次の交互作用は有意ではなく ($F(3,495)=1.751, n.s.$)、一次の交互作用もいずれも有意ではなかった (学

年×性別 : $F(3,495)=.966, n.s.$; 学年×規範 : $F(3,495)=.976, n.s.$; 性別×規範 : $F(1,495)=.000, n.s.$)。また、学年の主効果は有意であり ($F(3,495)=16.525, p<.001$)、性別の主効果は有意でなく ($F(1,495)=.268, n.s.$)、規範遵守目標尺度得点高低の主効果 ($F(1,495)=20.353, P<.001$) は有意であった。Tukey 法による多重比較の結果、3年生および4年生よりも5年生および6年生の方が得点が高く ($p<.001$)、また規範遵守目標低群の方が同高群よりも得点が高かった ($p<.001$)。各学年、性別および規範遵守目標高低別の「被害の否認」尺度得点平均値のグラフを Figure 5 に、記述統計量を Table 5 に示した。

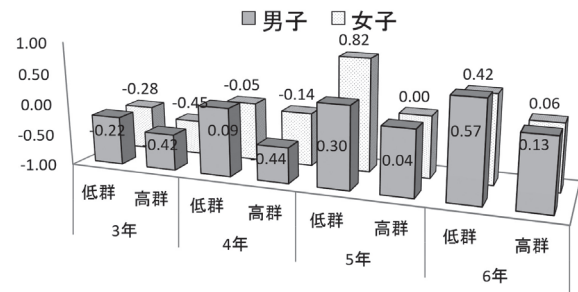


Figure 5 「被害の否認」尺度得点の平均値 (学年・性別・規範遵守目標尺度得点の高低別)

Table 5 「被害の否認」尺度得点の平均値と標準偏差

	3年		4年		5年		6年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
規範遵守目標高群	-0.42	-0.45	-0.44	-0.14	0.04	0.00	0.13	0.06
(標準偏差)	0.79	0.64	0.64	0.91	1.06	0.96	0.96	0.83
規範遵守目標低群	-0.22	-0.28	0.09	-0.05	0.30	0.82	0.57	0.42
(標準偏差)	0.75	0.75	0.96	0.85	0.84	0.58	0.83	0.71

III 学年、性別および規範意識と関係性攻撃尺度得点との関連について

続いて、関係性攻撃尺度14項目の得点を用いて因子分析 (主因子法, プロマックス回転) を行ったところ、「みんなで話しているときに、きらいな人が来たら、その人が話に入れないような話をわざとする」等12項目からなる第1因子と、「きらいな人がきまりをやぶったら、きびしく注意する」「きらいな人がふざけていたら、きつい言葉で注意する」の2項目からなる第2因子の二因子構造が得られた。項目内容から、第1因

子の項目を「仲間はずれおよび友人関係操作」に関する尺度、第2因子の項目を「過剰な叱責」に関する尺度と解釈した (Table 6)。それぞれの項目により構成される尺度の信頼性を検討するため Cronbach の α 係

数を算出したところ、「仲間はずれおよび友人関係操作」尺度は $\alpha = .92$ 、「過剰な叱責」尺度は $\alpha = .80$ と十分な数値が得られたため、以下はこの二つの尺度ごとに因子得点を算出して分析に用いた。

Table 6 関係性攻撃尺度項目の因子パターン行列 (主因子法・プロマックス回転)

項 目	因子負荷量	
	F1	F2
第1因子 (仲間はずれおよび友人関係操作) $\alpha = .92$		
みんなで話しているときに、きらいな人が来たら、その人が話に入れないような話をわざとする	.83	-.02
友だちといるときに、きらいな人が来たら、その人とだけわざと話さないことがある	.78	.02
きらいな人の、よくないうわさを友だちに言うことがある	.75	-.01
みんなで遊びに行くときに、きらいな人にはわざと教えないことがある	.75	.04
だれかにムカついたら、友だちにその人となかよくしないように言う	.75	-.09
きらいな人が来たら、他の友だちをさそって別の場所に行くことがある	.73	.05
友だちと話しているときに、きらいな人が来たら急にだまったり、こそこそと話をすることがある	.72	.09
きらいな人が、他の人にもきらわれるようにする	.71	-.04
友だちがきらっている人とは、自分もなかよくしないようにする	.62	.01
きらいな人の、イヤなところを友だちと話すことがある	.54	.17
きらいな人が何かに失敗したら、からかうことがある	.39	.33
きらいな人に「いうことをきかないと きらいになるよ」と言う	.36	.08
第2因子 (過剰な叱責) $\alpha = .80$		
きらいな人が きまりをやぶったら、きびしく注意する	-.00	.77
きらいな人がふざけていたら、きつい言葉で注意する	-.04	.89
因子間相関		.64

仮説②「規範意識の強い子どもほど、いじめ加害の傾向が高まるだろう」を検討するため、第1因子「仲間はずれおよび友人関係操作」尺度得点を従属変数とし、学年、性差および規範遵守目標尺度得点の高低の別を独立変数として三元配置分散分析を行ったところ、二次の交互作用は有意ではなく ($F(3,495)=.950$, n.s.)、一次の交互作用もいずれも有意ではなかった (学年 \times 性別 : $F(3,495)=.308$, n.s.; 学年 \times 規範 : $F(3,495)=1.700$, n.s.; 性別 \times 規範 : $F(1,495)=.052$, n.s.)。また、学年の主効果 ($F(3,495)=1.865$, n.s.) および性別の主効果 ($F(1,495)=.015$, n.s.) はいずれも有意でなく、規範遵守目標尺度得点高低の主効果 ($F(1,495)=76.262$, $p<.001$) が有意であり、規範遵守目標低群の方が同高群よりも得点が高かった。各学年、性別および規範遵守目標高低別の「友人関係維持のための隠蔽」尺

度得点平均値のグラフを Figure 6 に、記述統計量を Table 7 に示した。

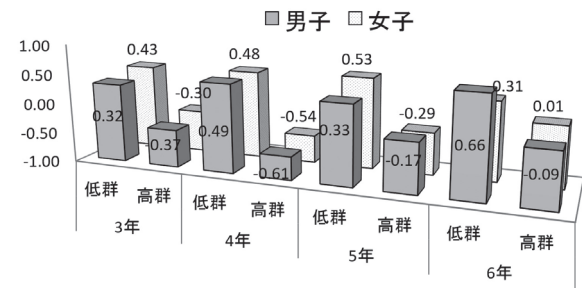


Figure 6 「仲間はずれおよび友人関係操作」尺度得点の平均値 (学年・性別・規範遵守目標尺度得点の高低別)

Table 7 「仲間はずれおおよび友人関係操作」尺度得点の
平均値と標準偏差

	3年		4年		5年		6年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
規範遵守 目標高群 (標準偏差)	-0.37	-0.30	-0.61	-0.54	-0.17	-0.29	-0.09	0.01
	0.51	0.90	0.40	0.56	0.90	0.73	0.63	0.94
規範遵守 目標低群 (標準偏差)	0.32	0.43	0.49	0.48	0.33	0.53	0.66	0.31
	1.24	1.01	1.30	0.91	0.92	0.95	1.10	0.89

続いて第2因子「過剰な叱責」尺度得点を従属変数とし、学年、性差および規範遵守目標尺度得点の高低の別を独立変数として三元配置分散分析を行ったところ、二次の交互作用は有意ではなく ($F(3,495)=.407, n.s.$)、一次の交互作用は「学年×規範遵守目標得点高低」のみ有意であった (学年×性別: $F(3,495)=1.143, n.s.$; 学年×規範: $F(3,495)=3.361, p<.05$; 性別×規範: $F(1,495)=.193, n.s.$)。また、学年の主効果は有意傾向 ($F(3,495)=2.312, p<.10$)、性別の主効果は有意ではなく ($F(1,495)=2.421, n.s.$)、規範遵守目標尺度得点高低の主効果は有意であった ($F(1,495)=55.506, p<.001$)。「学年×規範遵守目標得点高低」の交互作用について、単純主効果の分析を行ったところ、3年生および4年生においてそれぞれ規範遵守目標得点低群の方が同高群よりも得点が有意に高く ($p<.001$)、同様に5年生および6年生においても同低群の方が同高群よりも得点が有意に高かった ($p<.05$)。また規範遵守目標低群において3年生よりも5年生の方が得点が高く、同高群において4年生は3年生 ($p<.001$)、5年生 ($p<.05$) および6年生 ($p<.01$) よりも得点が低かった。各学年、性別および規範遵守目標高低別の「友人関係維持のための隠蔽」尺度得点平均値のグラフを Figure 7 に、記述統計量を Table 8 に示した。

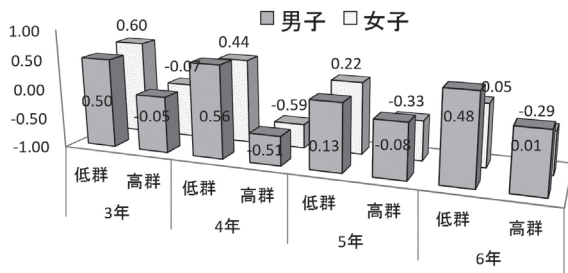


Figure 7 「過剰な叱責」尺度得点の平均値
(学年・性別・規範遵守目標尺度得点の高低別)

Table 8 「過剰な叱責」尺度得点の平均値と標準偏差

	3年		4年		5年		6年	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
規範遵守 目標高群 (標準偏差)	-0.05	-0.07	-0.51	-0.59	-0.08	-0.33	0.01	-0.29
	0.78	0.84	0.66	0.69	0.98	0.75	0.69	0.68
規範遵守 目標低群 (標準偏差)	0.50	0.60	0.56	0.44	0.13	0.22	0.48	0.05
	0.98	0.99	1.09	0.94	0.97	0.88	0.99	0.88

4. 考察

結果から、学年、性別および規範遵守目標の高低によって、いじめ被害の隠蔽およびいじめ加害傾向との関連が示された。

まず、いじめ被害隠蔽についてであるが、学年が上がるにつれ「問題悪化を恐れての隠蔽」「相談行為自体のデメリットによる隠蔽」「被害の否認」を選択する傾向が強まることが明らかとなった。逆に「友人関係維持のための隠蔽」は学年による有意差は見られなかった。小学校中学年から高学年にかけて、いわゆる「チクった」ことによって問題が余計にこじれることを恐れるようになることが伺える。先に述べたように、いじめ対処のための最も有効な方法として中学生は「無抵抗・服従」を選択すると上地 (1999) は指摘しており、小学生も高学年にかけて同様の傾向が強まっていくことが予想される。また「相談行為自体のデメリット」には、「恥ずかしい」「格好悪い」「思い出したくない」といったネガティブな認識が含まれており、いじめられっ子としての自分に向き合いたくないという前思春期の自己肯定感の低下や自己愛の傷つきの時期ともリンクしているように思われる。「そもそもいじめられているとは思わない」という「被害の否認」もまた、自己愛の傷つきに対する自我防衛的反応と捉えることができるだろう。いずれにせよ、これらの認識は被害者が自分自身を守るための相談行為を回避することに繋がってしまう。いじめ被害者に接する際には、本人の内面の傷つきに配慮しつつも、「嫌なことは嫌と言って良い」「誰もが傷つけられず生きる権利がある」という人権感覚を子ども達の内に育む指導が必要と思われる。

また性別の要因については、男子より女子のほうが

「問題悪化を恐れての隠蔽」「友人関係維持のための隠蔽」「相談行為自体のデメリットによる隠蔽」の得点が高かった。逆に「被害の否認」については男女差が見られなかった。実際にいじめ被害に遭った際、男子よりも女子の方が自身の被害を隠蔽しようとするものが伺える。いじめ被害を他者に相談する上での不安を減じるための支援が、特に女子に対しては重要であろう。

さらに仮説①に関連して、規範遵守目標低群は全ての因子において同高群よりも得点が高かった。つまり規範を遵守しようとする意識の低い児童は、「問題悪化を恐れて」「友人関係維持のため」「相談行為自体のデメリット」および「被害の否認」により、自らのいじめ被害を隠蔽することが示唆された。これは仮説①と真逆の結果であり、仮説①は支持されなかった。今回の結果から推測すると、「決まりは守るべき」と規範に信頼を寄せている子は、「いじめ被害を訴えても問題が悪化することはない」「友人関係に影響はない」と考えており、また「相談行為自体は恥ずかしいことではない」とも捉えている可能性がある。規範を遵守することによって自分自身もいじめ被害から守られるはずだと信じられるからこそ、躊躇なく他者に相談できるのだと予想される。つまり規範意識を高めることは、子どもがいじめ被害を早期に自分で解決する力を身につける上でも有効であると思われる。

続いて、いじめ加害傾向について考察する。関係性攻撃尺度の第1因子「仲間はずれおよび友人関係操作」については学年差および性差が見られず、規範遵守目標得点高低の要因のみ関連が見られ、規範遵守目標得点が低い場合に「仲間はずれおよび友人関係操作」によるいじめ加害傾向が強まることが示唆された。第2因子「過剰な叱責」については学年と規範遵守目標得点高低との間に交互作用が見られ、特に4年生において規範遵守目標の低群と高群の間に大きな差異が生じていた。他の学年においても、規範遵守目標得点が低い場合、「過剰な叱責」得点が高くなっていた。これらの結果は仮説②と真逆の結果であり、仮説②は支持されなかった。先の仮説①に関する考察と同様に、規範意識の高い子ほど関係性攻撃によるいじめ加害傾向は低まり、逆に「決まりは守るべき」と考えていない子ほど関係性攻撃の加害傾向が高いようであった。今回の結果から、「決まりを守る」「人の悪口を言わない」

「与えられた役割をきちんとこなす」といった規範意識の高まりが、関係性攻撃によるいじめ加害行為の抑制につながっていることが推測される。

5. 今後の課題

今回の調査結果からは、子どもの規範意識の高まりはいじめ加害行為およびいじめ被害隠蔽を抑制する可能性が示唆された。しかしこうした傾向が、中学生や高校生にも当てはまるかどうかは更なる調査と検討が必要である。特に中学生期は、仲間に対する同調性が高まる時期であり、時に規範意識や倫理観よりも、仲間からの反社会的な提案の方に同調する傾向が高まるということが指摘されている (Berndt,1979)。

いじめは子どもの日常に広く浸透しており、その発生をゼロにすることは困難である。しかしいじめ加害行為に走らない子ども、およびいじめられても被害を隠蔽せず他者に相談できる子どもを育成することによって、いじめを減らしたり、発生しても早期に解決することが可能になる。今後、いじめ予防に向けた実践の開発において、児童生徒の規範意識の醸成を踏まえることが必要であろう。

〈謝辞〉

本研究の調査にご協力いただきました児童の皆様、および教職員の皆様に心より御礼申し上げます。

〈文献〉

- Berndt,T.J. 1979 Developmental changes in conformity to peers and parents. *Developmental Psychology*, 15, pp.608-616.
- 久保順也 2013 児童生徒間のいじめに関する心理学的研究の展望. 宮城教育大学紀要, 48, pp.229-241.
- 久保順也・佐藤宏平 2014 関係性いじめの被害者・加害者の認識の差異 - 友人親密度認識といじめ認識に着目して -. 日本カウンセリング学会第47回大会発表抄録集, pp.159.
- 宮城教育大学BPプロジェクト 2017 特別支援教育といじめ. いじめ防止支援プロジェクト事業成果報告書, pp.5-16.
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 2015 平成26年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」の一部見直しについて.
- 文部科学省初等中等教育局児童生徒課 2016 平成27年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査(速報値).

上地広昭 1999 中学生のいじめの対処法に関する研究. カウンセリング研究, 32, pp.24-31.

(平成29年9月29日受理)